叶えぬ神に意味はなし

乱々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
叶えぬ神に意味はなし

【Ｎコード】
Ｎ０３２９Ｘ

【作者名】
乱々

【あらすじ】
「かみさまってほんとうにいるのかな」
恋に純朴すぎる少年が出会ったのが人々に忘れられた恋愛の神様だったら。
少年と神様に仕える少女の日常と成長を描く、
どこにでもあるようなどこにもない小さな恋の物語。

と、適当なあらすじもほどほどに、

もともとあらすじなんて存在しないほどに粗い筋書きなので、お恥しながらこれ以上書きようもございません。
なにぶん文章を書くのは初めてなもので、読者さまが退屈になって欠伸をしてしまう暇をも与えないほどに、うっすいうっすい内容になっている気がしないでもありませんが。
稚拙な表現、簡素な文章、脈絡のないストーリーに誤字脱字、など突っ込みどころ満載とは思われますが、
そこは読者さまの寛大さにご容赦いただくとしまして、
この物語が、読んでくださる方のほんの暇つぶしの役割でも果たしてくれれば、幸いといった所存です。

私も誠心誠意精一杯、少年少女らの青春を描写して参ろうと考えておりますので、
よろしければ、お付き合い下さいませ。

1-1

森羅万象。
意味、宇宙に存在する一切のもの。あらゆる事物・現象。
京志郎はこの四字熟語が好きだったりする。
表面的な意味だけを取れば、「万物」とか、もっと単純に、平易に言うなら「世界」とかとほぼ同義なのだろうが、この「森羅万象」にはそれらの言葉にはない壮大さと浪漫を感じる。
特に好きなのは「森羅」の部分だ。「シンラ」と言う鋭角でスタイリッシュな読み、そして、ミステリアスで神秘的な雰囲気を持つ漢字が織りなすハーモニーは京志郎の潜在的美意識を鷲掴(わしづか)みにして離さない。
こんなに美しい外見とは裏腹に、その意味が「無数に並び連なること」と、肩すかし的に平凡なのもまた彼を大変に魅了する。
無論、「万象」の部分も捨てがたい。「バンショウ」という読みは「シンラ」と肩を並べることにより、その荘厳(そうごん)さと古めかしいさが一層に増して「森羅」を際立たせる。
完璧だった。
京志郎には森羅万象と言う言葉はこの上ないほどに完成されているように見えた。

しかし、しかしだ。
いくら好きだからといっても、その言葉が書かれているもの全てを無差別的に好むかというと答えは全くのＮＯで、ましてやそれが自分にとっては出来れば所持しておきたくないな、と思うものをなら尚更だ。
言うなればそれは、大好きな恋人の作る自分が大の苦手な料理のような、いやこの場合は、滅茶苦茶憎い相手が作った大好物、の方が合っているかもしれない。食べることには全く支障がないが何か釈

然としない、そんな感じだろうか。

「どーすっかなぁ…」

この登校前の慌ただしい時に納得のいく答えが出るまで悠長に考えている暇はそんなに無いのだが、それでも、腑に落ちないまま決めてしまった結論に後悔するのが嫌な京志郎は、朝の貴重な時間を悩むことに彼是5分も費やしてしまっている。

登校の準備は済ませた。後はこれをどうするかだけなのだが。

悩ましげにそう考える京志郎の、その指に抓(つ)まれてぷらぷらしているものこそが彼を優柔不断たらしめる元凶、お守りとおぼしき小さな赤い巾着だった。

それは昨日までの連休の間、実家に帰ってきていた母が京志郎に託したもので、よく分からないが、母曰く、「すっごく御利益がある」らしく、はなみ放さず持っておくよう命じて渡されたものだった。

彼がいったい何に悩んでいるのかというと、この巾着を母の言葉通り常時身につけておくかどうかというところだった。

お守りなのだから付けていて損は無いはずなのにここまで決断に困っている理由、それはこの小さな巾着が、それはもう「かわいいお守り選手権」なんぞを開催した日にはぶっちぎりで優勝を飾りそうな程小さくて可愛くて、そのくせに、田舎の不良が一張羅の白長ランの背にでかでかと入れる「夜露死苦」の文字のように、金の刺繍(ししゅう)で華々しく「森羅万象」と書かれていたからである。

そして何故お守りに「森羅万象」なのか。

何故なんのお願い事でもない「この世のものすべて」のと言う意味の四字熟語をお守りにしようとしたのか。皆目見当がつかない。

使いどころを間違えれば、いくら格好のいいことを言っていてもバカにしか見えない。その典型であろう。

心情的には今すぐにでも机の引き出しにこの巾着をしまって、学校

へと急ぎたいのだが、
「…。」
いかんせん、母の助言に背いて失敗するのも怖い。
京志郎は中学の時に母に反抗したことで腕の骨を折ったことを思い出す。
京志郎の母は自称超能力者で、予知能力を駆使し、身内に降りかかる災いを助言によって未然に防いでいるらしい。
カオスだ。
ちょっと心の弱い子ならば非行に走ってしまうかもしれない。

だが、思い返せば彼女の助言によって助かったことも多いし、現にその言葉に従わなかったことで痛い目をみた経験もあり、なんだかんだで京志郎はその予知とやらの信憑性があるように思えていた。
自己の考えとしては、超能力よりも霊感の方ではないかと疑ってもいるが。
（ま、小さいしそんなに目立たないだろう。もう迷ってる時間もねぇしな）
自分の面子よりも保身を優先することにしてそう言い聞かせ、せめて月嶋さんだけには見つかりませんようにという願いを込めて、京志郎は小さな巾着を鞄にぶら下げた。
おそらく姉はまだ寝ているので小声で「いってきます」と言って家を出た。

そうして京志郎はまた、後悔することになる。

1-2

さて、自宅を後にした京志郎が学校へ向かうまでの道すがら、簡単な基本情報をチラッと公開しておこう。
彼が住んでいるのは、県境に位置する山の麓（ふもと）の小さな町だ。
決して「街」ではない、「町」だ。
「小さな」と言ってもそれは規模の話で、面積自体はそこそこ広い。緑が溢れ、空気もおいしく、のどかで住みやすい、実によい町である。
まあ言ってしまえば田舎なのだが、少なくとも京志郎はそう思うようにしている。

北は山、南は海に囲まれており、地図の上方から下方へゆくにつれ、なだらかに等高線の指す値は低くなっていく。
海側の方が少しばかり栄えてはいるが都会と呼ぶには程遠い。
しかし、この辺の人達は海側を「都会側」と言ったりもする。
それは町の北側が余りにも開発されないまま本当にただの山の状態で放置されているからで、それに比べれば都会だなぁ、と言った感じでそう呼ばれている。
京志郎の家は繁栄の南と未開の北の境目となる住宅地のちょうど真ん中辺りにあり、彼はこの家で姉と二人で暮らしている。
訳あって父は一緒に暮らしておらず、母も仕事の都合で今年から全国各地を回っているため家にはほとんどいない。が、二人とも健在である。

また、京志郎がこの春から通っているのは県立三守（みつがみ）高校で、京志郎の家からは、文字通り北上して徒歩で15分くらい。
偏差値レベルで言うならランクは中の上。勉学面よりもスポーツの盛んな学校で、とにかく敷地が広い。

グラウンドは野球部とサッカー部がフル活用しても余るほどでかく、中庭もなぜか3つあり、さらには青々とした木々が生い茂る裏庭もある。
というか、裏庭はもはや森といった感じで、遠目では裏の山とつながっているようにも見える。

京志郎はそこの1年7組に所属しており、まだ入学して一カ月と言うこともあるだろうが、見た感じではクラスの雰囲気は落ち着いていて、今のところは割と居心地のよいクラスであった。
少なくとも中学の時の様な波乱万丈な荒ぶる学園生活を送ることとは無縁そうで、それだけでも京志郎の心を穏やかにするには十分だった。
あんな日々はもう沢山だ。

と、ここでチュートリアル的な説明文は終わりにする。
それは、だらだらと通学路の微妙な山道を登校していた京志郎が目的地の教室へ辿りついたからである。
巾着にいらぬ時間を割いてしまった所為で平常より少し到着が遅れたが、まだ朝のホームルームには余裕がある。
京志郎は7組のドアを開け、入学時に指定されてから未だ変わらない自分の席に座る。

すると、その姿を見とめた一人の男が斜め後ろから京志郎の席へと近づいてきた。
「おはようさーん！シロー」
「おー」と、京志郎は振り返らずに右手を軽く上げ適当に挨拶をする。
声の主は判っている。
自分のことを「シロー」などと呼ぶのはこの学校にはそういないし、朝っぱらから感嘆符を付けて挨拶してくる奴となれば、浮かび上が

る顔は一つだ。
「おはようさん！シロー」
同じセリフを同じトーンで繰り返しながらその声の主、金髪・糸目の男は、まだ空席の京志郎の後の席に座る。
「遅かったやんけ？休み明けで寝坊するとは小学生みたいな奴やな」
「不当な罵(ののし)りを受けたとして名誉毀損(きそん)で訴えるぞ。それに別に寝坊した訳じゃないし、ホームルームにも間に合った。無問題(もうまんたい)だ」
「それならまた何か悩んでたんやろ？どのネクタイを着けて行こうかなぁ、とか」
「ネクタイはスペアと合わせて2本持ってるけど、どっちも一年の学年色の赤色で学校指定の同じもんだから迷う余地はねぇな」
「うへへ。こうゆうやり取りも久しぶりやな」
この地方には珍しい方言を操り、独特な笑い方でさぞ嬉しそうに京志郎と喋っているのはクラスメイトの逢阪(あいさか)。
京志郎の悪友でもあり、平穏を脅(おびや)かす不安要素その1でもある。

「久しぶりって今年のゴールデンウィークたった4日だけだったぞ」
「んにゃ、4日でも十分久しいわ。こんな返しをしてくるんは俺の周りではシローだけやからな。会いたかったで、シロー」
すごくいい顔で言う逢阪の目はキラキラと輝いている。（実際は目はほとんど開いてないのでこれは比喩）
「俺は会いたくなかったけどな」
「おやおや、登校早々おとくいのツンデレかいな」
「俺は生涯お前にデレた覚えは一度たりともないがな」
そう言うと逢阪は再び、うへへへっと笑い
「このツンも久しぶりやと堪らんなぁ…」
両手で頬を押さえ顔を赤らめている。
そんな様子に京志郎は言いようのない寒気を感じて思わず身震いをしてしまう。
（このノリも4日ぶりだとかなり堪えるものがあるな。うん、じつ

にきしょくわるい）

ご覧の、いやお聞きの通り逢阪は関西地方の出だ。
中学1年の夏にこの町に越して来たらしく、京志郎とは2年でクラスメイトとなりその際知り合い、友達になった。
はずだったのだが何故かある時から京志郎のことを妙に気に入るようになり、以来ずっとこの調子なのだ。
といっても京志郎のことを恋愛対象として見ているとかではないので、そっち方面の展開は期待しないように願いたい。

「あ、そういえばこの休みに」
ガラッ。
「おーい、ホームルーム始めっぞー」
これ以上きしょくのわるい悪友の顔を見たくないので、話題を変え、母が託した巾着について話そうかと思ったところで1－7の担任、田中が教室に入って来た。
ほら座れいー、と生徒たちに着席を促し、それに伴って、ほななぁと逢阪は自分の席に戻る。
逢阪は情報通で、七不思議のようなオカルトチックな話題は逢阪の最も好む話だったので母の不可思議な力について相談するにはベストな相手だと思ったのだが。
（タイミングが良いのか悪いのか分からないよ、田中先生）

1-3

放課後。
ホームルームが終わり、田中が教室を後にすると同時に室内は生徒たちの声でざわめき出す。
お守りのことがあったので何か起こるのではないのかとひやひやしていたが、幸いそれは杞憂(きゆう)だったようだ。
休み前と何ら変わらず穏やかに流れる日常に安堵し、京志郎は鞄を肩に携(たずさ)えて帰途に着く。
高校では入学前から決めていた帰宅部に所属しているのでこれ以上ここにとどまる理由もない。
自宅で待っている怠惰な時間を過ごすため、席を立ちクラス後方の扉に手を掛けようとした瞬間、

ガラッ。「え？」
ドアが自動で開いた。
かと思うと、一人の女生徒が教室に入ってき、
「おーい！いいんちょーうおぉっ！」
7組の副委員長、通称「いいんちょ」を満面の笑みと朗々とした声で呼びながら扉のレール部に足を引っ掛けて、
「ぅわあああ！」
「だぁぁぁ！」
盛大にこけた。
目の前にいた京志郎を押し倒す形で。
「いたたた、ごめんなさあい…」
「あぁだいじょう…」
自分の上に乗っかったままの転倒者から漂ってくるのは鼻の奥の方を刺激する仄(ほの)かなシャンプーの匂い。
そして動きやすさと可愛らしさを兼ね備えた見覚えのあるショート

ボブヘアーにスカートの下の紺のスパッツ。
（これは確か…！）
「つ、月嶋（つきしま）！？」
きの部分で声が裏返ってしまった。
「あ、久遠（くどう）くん。ゴメンねぇ、だいじょうぶ？」
倒れて来たのは隣の８組の女子、月嶋想依（つきしま おもい）だった。

京志郎が下敷きになったのでどこかを打った訳ではないと思うが、何故か頭の右側をさすっている。
想依はその少し舌足らずな声で心底心配そうに京志郎の安否を尋ねてくる。
「お、おう、大丈夫だ」京志郎は首を縦にブンブン。
「よかったぁ、怪我でもさせちゃったらどうしようかと思ってハラハラしたよお。まったく、扉の前なんかに突っ立ってたら誰かにぶつかられちゃうかもしれないよー？」
「お、おう、スマン」
「んもーそうじゃなくてツッコミいれてよお。オーサカくんにしてるみたいに、『なんでぶつかられた俺が怒られてるんだよ！ベイベー！』ってさぁ」
目を吊りあがらせて右手でビシッと空を切る。
もちろん突っ込むところはそこではないし、想依のツッコミ自体もツッコミどころ満載だが、
「お、おう、スマン」
気が動転している京志郎は気のきいた言葉を返すことも儘（まま）ならず返事は至って単調。
日々の鍛錬により絞りあげられた、しかし決して華奢（きゃしゃ）というわけではなく出るところはそれなりに出ている想依のしなやかな肢体が、馬乗り状態で超至近距離にあるという事実現実を認識し卒倒してしまいそうな意識を保つだけで精一杯なのだ。
眼前にある想依の顔を直視できず無意識的に俯くと自然と自分の身

体と密着している想依の胸元が目に入って来て、慌てて目を逸らすと今度はうっかり想依の顔の方を向いてしまい、溢(あふ)れ出す照れと純情からどこを見ていいのか分からなくなり、京志郎の黒眼は熱エネルギーを得た気体分子のように高速で動いている。

「ダメダメやな、シロー。こんなステキイベントが棚から転がり落ちて来たっちゅうのに」

（！！）

「あ、オーサカくん。おはよおー」

気付けば逢阪(あいさか)が後ろで腕を組み、やれやれといった表情で立っていた。

「おはようさん、月嶋。って、オレの名前はアイサカやって言うてるやろ」

「えーいいじゃん？関西弁なんだし」

想依はえへへ、といたずらっ子のようにはにかみながら笑顔を見せる。すっごくかわいい。

「それ理由になってへんで。それよりそろそろ退(の)いたってくれへんか？」

「へ？」

逢阪は失敗続きで副店長に叱咤(しった)されまくっている新人アルバイトを見る店長の様な目で、

「ウチの相方、そろそろ限界みたいやわ」

何かを訴えようとしているが声にならず、口をパクパクさせている京志郎を一瞥(いちべつ)する。

「あぁぁ！ごっめん、久遠くん！あたしそんなに重かった？」

逢阪が意図するところに気付き、想依はハッと飛び退く。

京志郎は「大丈夫だから心配するな」という思いと「全然重くなかったから気にするな」という気持ちを込め、首を左右にブンブン振る。

「そっかぁ、よかったあ。じゃあまたねー」

そう言って想依は笑顔で手を振り、いいんちょのもとへ駆けて行ってしまった。

「ぶぁはっ！し、死ぬかと思った」
「だいじょぶかシロー？って何で息まで止めとんねん」
ハァハァと息を荒立てて、足りない酸素を必死に補給する京志郎に逢阪は苦笑い。
「だってよお、月嶋、すっげぇいい匂いしたんだよ…」
「息荒立てながらのそのセリフ、めっちゃ変態みたいやで。ていうかお前、月嶋の前やとホンマに慌てん棒のシローさんやなぁ。ダメダメやわ」
「う、るせぇよ。んなことは重々承知してる。てか、誰が相方だ」
「月嶋想依、俺らと同じ九坂（くさか）中学校の出身、運動神経抜群で女子バレーボール部期待の1年生。誰に対しても裏表なく接し、その快活な性格から交友関係も広い。また、時たま常人では理解し得ない言動をし、他を混乱に陥（おとしい）れる筋金入りの天然ボケ。だがそれもまた皆から気に入られる要因になっている模様。好きな食べ物は蓮根とバームクーヘン…っと。こんなとこか」
逢阪は目を閉じ（もともとほとんど開いていないが）、化学教師が原子番号順に元素名を答えてゆくかのような流暢さですらすらと想依の基本プロフィールを暗唱してみせる。
「相変わらずの記憶力だな」
「これくらい出来な一流の情報家とは言い切れんからな」
逢阪は自慢げだ。京志郎も今更驚きはしないが感心する。
でも一女生徒のプロフィールを暗唱できるこいつの方がよっぽど変態じゃね？、とも思ったが口にはしない。

「しかしあいつのどこがええんか俺にはよー分からんわ。確かに元気で明るいし可愛らしいとは思うけど。なぁ、どこに惚れたんや？」
「だぁぁー！声がでけえよ！クラスの皆に聞かれたらどうすんだよ

！どう言い訳するんだよ！誰も信じちゃくれねえよ！」
「言ってること滅茶苦茶やで、シロー。それにな、こういうんは周りにそれとなく気付かせといて、応援やサポートしてもらった方が順調に事が運ぶもんやねんで？」
「確かにそうかも知れんが、」
二人が親睦を深められるような状況やキッカケを周囲に作ってもらえれば、それは奥手な京志郎にとっては大きな武器になるだろう。
「ヤなんだよ、そういうの」
しかし京志郎が求めているのはそんなことではない。
「あくまで人の力は借りんと？」
「あぁ、それはずっと前に決めたことだ」
京志郎の望みは想依と恋人同士になることやキスをすることやその先のナニヤラなどでは断じてない。
ただ、想依ともっと仲良くしたい、会話がしたい、一緒の時を過ごしたい、それだけなのだ。
そんな恋とも覚束ないような淡い想いを、誰かに見られるのは耐え難いことだった。

「まあしゃーないか。そういう信念を持つところもシローのいいところでもあるしな」
京志郎の確固たる意志の籠(こも)った眼差しに逢阪は微笑を浮かべそう言った。
なんだかんだいって逢阪は自分のことをよく理解してくれている。
それが京志郎が逢阪とつるんでいる理由でもある。
（こんな奴でもよき理解者が近くにいてくれるってことは幸運なことなんだろうな）

「んなら、神様の力でも借りてみたらどうや？」
「へぁ？」

1-4

黄金色の一週間が明け、今は5月上旬。
季節的にはまだまだ春だが、今日の様な太陽の恵みが燦々(さんさん)と降り注ぐ五月晴れには、放課後で日が傾きかけていると言えど野外で長時間動き続けるとなると流石に額にも汗がにじんでくる。
「はぁ、はぁ」
長い持久運動に息は上がり、足取りも重くなってくる。
しかし、ゴールはまだ見えない。
幾度か引き返そうかとも思ったが、それもまた骨の折れることだ。
振り返ったところで出発点はとうに見えなくなっているだろうし、ここまで来るのに駆けた時間と労力を無意味なものにしたくない。
進むしかない。
分かっている。しかし、しかし、
「はぁはぁ…。どこまで、続くん、だよっ、これはあああっ！！！」
思わず咆哮(ほうこう)。

嵌(は)められたことに気付くには少し遅すぎた。
『学校の北西にすごい恋愛成就の神社があるらしいねん』と囁(ささや)き不敵な笑みを浮かべる悪友の悪どい顔がフラッシュバックする。
「あいさかのーボケえええー！！！」
再び咆哮、そして罵倒。
想依が倒れて来た後、混乱状態と放心状態の混在により正常な判断を下すことのできなかった京志郎はまんまと逢阪の言葉を鵜呑(うの)みにしてしまい、気付けば寂れた石色の小さな鳥居くぐっていて、今は延々と続く長い長い灰色の階段のちょうど100段目辺りを登っているところだった。
「くそ、俺を実験台にしようって魂胆だな」
逢阪は『あるらしい』と言った。

それはその情報が確定された事実ではないこと、すなわち逢阪自身がまだ裏取りを完全には終えていないことを意味していた。

『らしい』がどの単語に係っているのか不明だが、今京志郎が上っている階段は学校から十時の方向に位置しているし、鳥居が建っていたことからもこの先にあるのは神社で間違いないだろう。
だとすると定(さだ)かでないは『すごい』と『恋愛成就』の部分ということになる。
『らしい』が『すごい』に係っていれば「どの程度の効力があるのか」がハッキリしていない。『恋愛成就』に係っていたならば「何の恩恵があるのか」が判らない。
どちらにしても曖昧な箇所を明瞭にするためには程度を計るための被験者が必要になる。
つまりそれが汗だくで天へと歩み続ける哀れな男。久遠京志郎。

「何がよき理解者だ」
そうぼやきながら落ちていた小石を坂の下へと蹴り飛ばす。
逢阪は京志郎を利用しこの神社の信憑性(しんぴょう)を計ろうとしていたのだ。
少しでも逢阪のことを親友だと思ったのが馬鹿だった。やはり悪友は悪友でしかなかった。
まるで希望の光が差したかのような顔をして逢阪の話を聞いていたさっきまでの自分に冷水でもぶっかけてやりたい。
「はぁ…」
思わず溜息。離婚直後に結婚詐欺に遭ったような気分。
無論気は進まないが、歩(ほ)を進めるよりほかないので、仕方なしにこの心臓破りの石段を制覇してやろうと決め、とうに重くなってきた足を引きずりながらしばらく登ると、やっと頂上が見えてきた。
ゴールには、石段のスタートに立っていたものよりもうんと大きな鳥居がそびえている。

最後の一段を登り切って一息つき、境内(けいだい)を見回す。
「へぇ…、意外と立派なんだな」
なかなかの広さがある境内のほぼ中央に大きく荘厳(そうごん)な社が建っていた。
がしかし、手入れが行き届いていないのかかなり老朽化が進んでいて、境内も綺麗に掃除されているものの、石畳には所々にひび割れが生じている。
また、背の高い樹林の中にあるせいか妙に薄暗く、風が吹くたびに木々がざあざあとざわめき立つ。
逢阪の情報に誤りがあるとは考えにくいが、
（…こわい）
こんな所に恋愛成就の神様が祭られているとは到底思えない。
言っては失礼になるのかもしれないが、ぶっちゃけめっちゃ不気味だ。
灯篭なども無く、夜中にでも訪れれば、山中にある墓地に匹敵するであろう絶好の肝試しスポットになること請け合いだ。
妖怪変化の類でもでやしないかと、若干以上の警戒心を持ちつつも恐る恐る参道を進む。
「狛犬みたいのも鈴すら無いのに賽銭箱だけは置いてるんだな…。しかもしっかり磨かれてて綺麗だし」
神社がいかにして生計を立てているのかは不明だが、お賽銭も重要な財源なのだろう。
手を掛けんとする気持ちもわかる。
一体幾人がこの直方体の木箱に銭を投げ入れているのかは知らないけれど。

「まぁ、わざわざ貴重な体力と時間を費やしてこんなとこまで登って来たんだしな、ついでにお願い事でもしていくか。このまま何もしないで引き返したりしたら悲鳴を上げてまで俺をここまで連れてきてくれた俺の脚に申し訳ないからな」

誰に対してでもなく自分発信自分宛ての独り言を言い訳のように呟き、財布から１００円玉を取り出してずうずうしく口を開けて待っている木箱に放り投げた。そして、
（月嶋と仲良くなれますように月嶋と仲良くなれますように月嶋と仲良くなれますように月嶋と…）
ぎゅっと目を閉じ、想依のことを思い浮かべ目いっぱいお願いする。
「月嶋と仲良くなれますように月嶋と仲良くなれますように月嶋と仲良くなれますように月嶋と…」
思っていることが口から盛大に溢れだしてしまっているが、どうせ他に誰もいないのだ。
構うことはない。

すると、吹いていた西風が止んだ。
かと思うと再び強い風が前方から吹いてきた。
（え、前から？でも、前には…）
そんなはずはない。前方には社があるはずだ。自然現象の矛盾を感じて目を開けると、
「うっ！？」
青く、白く、眩い光が目に飛び込んできた。
京志郎はとっさに手で瞼を覆う。
（な、何だ！？）
光は、目の前の賽銭箱のちょうど真上あたりから放射状に広がり、京志郎の網膜に突きささる。
（何だ、何だ何だ何だッ！）
突如目の前で発生した超常現象に軽くパニックに陥る。
光輝は、徐々に強くなり京志郎の体を包んでゆく。
足に力が入らなくなり、京志郎はその場に跪く。
（うそ、だろ…）
自分の生命力を圧倒的な力で捩じ伏せる様な強い、光。
やがて、体全体に力が入らなくなり、視界は霞み、脳の回転速度は

落ちてゆく。

どさっ。

（あいさか…、なぐる…、ぜってぇ…）

京志郎は石畳の上に倒れ込み、じきに意識もブラックアウトしていった。

薄れていく意識の中で光中に人影のようなものを見たような気がした。

2-1

「はっ！」
目に飛び込んできたのは知っている天井だった。ここは、
「俺の部屋…か」
ベッドから体を起こし周りを見る。そこは紛れもない、京志郎の部屋だった。
「まさか…、夢…？夢なのか？」
……。
「支度するか…」
人間というものは自らの理解を超えた物事を無意識に忌避（きひ）しようとするものだ。京志郎もそんな人の条理に従って現実逃避をしたものの、
「覚えてる…もんなぁ、全部」
望むなら夢であってほしかったが、そう都合良くは行かない。
夢オチなんてのはリアルには存在しないのだ。現実の融通の利かなさに落胆しつつ、布団から出て登校準備に取り掛かる。

昨日、京志郎が意識を取り戻すと辺りはすでに薄暗く、ついでに言うと目を覚ました時いた場所は境内ではなく階段の入り口にある鳥居の辺りだった。
起きてからしばらくしても夢見心地で正常に働かない脳をと、やはり重たい脚を連れて、ほとんど帰巣本能だけを頼りに自宅に辿りつき、それからは終始ぼーっとしながらも夕食を取り風呂に入り、すぐに床についたのだった。
（神社を訪れた参拝者とか、あるいは神社に仕える神主とか巫女とかに助けられて、その人の家で目覚めて、ついでに得体の知れない謎の力にも目覚めて、とかいう展開だよな普通…）
普通？

いや普通ではないにしてもそういった成り行きもフィクションにおいてはありふれたものだろうが、そこはやはり現実。そんな少年漫画のように分かりやすく事は運ばない。
ついさっき実感したところだ、つまりは間抜けな自分への嘲笑を含めたほんの冗談。前半部は、まあ現実にも起こり得ないとも言い切れないが。

見ず知らずの高校生を拾ってくれるような善人を呼び寄せる力は自分には備わっていないのか、と洗面台で鏡越しの自分の寝起き顔を見つつ日頃の行いを改め直す気概が湧き上がってくる。
……。
わけもない。
単純に昨日の神社での出来事を深く考えたくないだけだ。
ただの現実逃避。
だって、訳分かんねぇもん。

「まだこんな時間か。このままだとかなり早く着くなぁ」
カッターシャツに袖を通しつつ現時刻を確認する。壁にぶら下がったアナログの掛け時計は短針をちょうど真下に向けている。昨夜はかなり早い時間にベッドでスリープモードに入ったので自然と早起きになったのだろうか。
これでは学校で1時間以上の時を持て余してしまう。二度寝する程の時間は無いし、そもそもたっぷり取った睡眠のせいで全く眠くない。

（ん？）
どうしたものかと暇つぶしの手段をあれこれ考えつつ、鞄をゴソゴソして時間割を合わせていた京志郎が気付いて取り出したのは、数式やグラフなどが印刷された一枚の藁半紙。これは、
「あっぶねぇ、昨日出た数学の宿題だ。すっかり忘れてた」

数学担当の教師は授業態度の悪い者や課題の提出を怠る者には厳しく、また怒り方はかなり粘着質（逢阪情報）なため、叱責を受けるのは是非とも回避したい。早起きしたのは僥倖だったのかもしれない。

「よし、暇つぶしのあても見つかったし、さっさと用意して出発しますか」

ゆっくり目に登校準備をして常時より３０分ほど早く家を出た。

晴天、とは言えないが、曇天、とも言い切れない微妙な天気の下、通学路には、中途半端に早い時間のため一般生徒はもちろん、朝練に向かう生徒もいない。

普段は味わうことのできない静けさの中、早起きするのも悪くないなどと考えながらまだ生活指導の職員もいない校門をくぐって教室へと向かう。

「へ？」

つもりだったが、京志郎は昇降口でひたと足を止めた。

腰までである長い黒髪のストレートヘアーに切りそろえられた前髪。やたらと端整な横顔に透き通った雪のように白い肌。

綺麗すぎる二重瞼のキラキラと輝く大きな目。

昇降口に一人の女生徒が立っていた。

（こんな時間に他の生徒がいるとはな）

京志郎が上げた間抜けな声にバッと振り向き、京志郎の姿を見てその女生徒の目は見開らかれていく。

彼女は左手で下駄箱のふたを開け、右手には紙切れの様なもの握った体勢のまま固まった。

制服の胸のあたりに結ばれたリボンは赤色なので、同じ1年生だろう。

黒髪の女の子は京志郎をじっと見つめ微動だにしない。

対する京志郎もなんとなく目を逸らせずに、気まずい空気の中２人

は見つめあったままだ。というか、目力がものすごい。

「あの、」

びくっ！

ばたん。

耐えきれずに京志郎が口を開くと、その女の子は驚いたように少しのけ反り、解放された下駄箱のふたが物理法則に従い音を立てて閉まる。

少々戸惑ったが、京志郎は意中の疑問を尋ねてみる。

「ええと…、俺の上履きに何か用かな？」

何故、この娘はこんな早い時間に登校してき、見ず知らずの自分の下駄箱を開けていたのか。

「…。」

女生徒の堅く口は閉じられたまま、目だけは下を向いたままきょろきょろと挙動不審に動いている。

混乱してどうしていいか分からない、そんな表情で彼女は舌唇を軽く噛んで、両手は胸元のあたりでをキュッと握られている。

（聞き方がまずかったか？）

見知らぬ女生徒が自分の下駄箱を無断で開けているところに偶然遭遇してしまった時の、最良の反応とはどんなものなのだろうか？

京志郎は何も怒っている訳ではなかったが、不審感から少し口調がきつくなってしまったかも知れない。少し反省、真摯（しんし）な態度で再び訊ね直す。

「えーと、きみぅわっ！」

突然、俯いていた少女が顔を上げ、キッと覚悟を決めたような目をしたかと思うと、口を開いた京志郎をガン無視でいきなり走り出し、校舎を飛び出して校舎裏の方へと駆けて行った。

「えーなんだよそれ…」

一瞬怯(ひる)む。が、
「逃げるってことは、やましいところがあるって事だよな！」
追うか追わないかで迷う前に、すでに脚は走り出し少女の後を追っていた。
そして京志郎の頭からは最早白紙のままの数学の宿題の存在などとうに消え去っていた。

2―2

「はぁ、はぁ」
「はぁはぁ…、へへっ、やっと、追い、詰めたぜ…」
悪党なセリフを吐き、京志郎は思わず口角を上げてニヤリとする。
しかし、表情とは裏腹、体力の方はすでにエンプティ。
脚は立っているのがやっとで、さっきからふくらはぎのピクピクが止まらず、左右を同時に攣ってしまいそうだ。
動悸も当分治まりそうにない。

黒髪少女の走力は京志郎の予想の遥か天上をいっていた。
脚の速さには少しばかりの自信を持っていた京志郎だったが、彼女はそんなちっぽけな矜持など打ち砕かんとするような快走っぷりで、サクッと捕まえてサラッと事情を聞き、すぐに踵を返す予定が、彼是１０分近く少女と校舎裏で追いかけっこをする羽目になったのだ。
（いったいこの娘、何もんなんだ）
相手が女の子だと思って油断していたこと（これについては深く反省）を考慮しても、１０分ものあいだ全速力で走るなんて、男でもなかなか出来る芸当じゃない。

「はぁ、はぁ」
見ると黒髪の少女もさすがに疲れたのか、校舎の外壁に背中を預けて苦しそうに息をあげている。
走りすぎでか目にはうっすらと涙が浮かんでいるようだ。
が、瞳はそんな疲労など感じさせないほど凛としており、執拗に自分を追いかけて来た男を睨みつけていた。
（って、これじゃまるで俺が悪者みたいじゃねえか！）
この場だけを見れば誰だってそう感じるだろう。
女の子をしつこく追い回し、あげく追い詰めてにやけながら「はぁ

はぁ」言っているのだ。もう変態にしか見えない。
（くそっ、やっと捕まえられた嬉しさで顔がにやけてしまった！ていうか捕まえてどうするんだ？）
今更ながら冷静になり自問自答。
ほとばしる正義感に突き動かされてとりあえず条件反射的に追って来てしまったが、捕まえた後のことを考えるのを忘れていた。

（大体彼女が何をしていたのかも不明瞭なのに、逃げたって理由で追いかけまわしたのはやっぱまずかったか…。もしかしたら俺の上履きがその辺に転がってたから下駄箱にしまってくれてただけなのかもしれないのに…）
彼女が本当に善行を行っていただけだとしたら、自分は本物のサイテー野郎だ…と、汗で頭がいい具合に冷えてきたところで、勢い任せの行動を取ってしまったことに深く後悔する。

落胆する哀れな京志郎をよそに、黒髪少女は憤怒（ふんぬ）の形相（ぎょうそう）だ。
彼女は逃げ出したいようだが、疲れて脚が動かないのだろうか、相変わらず息を切らしながら京志郎をキッっと睨（ね）め付けたまま動かない。
（とりあえず追っかけ回したことを謝って、それから何をしていたのか聞こう。うん、そうしよう）
「あのー…ごめんな、追い回したりして。悪気は無いんだ。つい、って言うか、条件反射でさ。…それで、君はいったいな
「この罰当たり童（わっぱ）め」
「…！？」
弁解と和解の希望をのせた京志郎の発言を、もはや現代人が日常会話では使うことのないと思われる単語を含めた言葉で遮ったかと思うと、
「覚えておれっ…」
ドサッ。

「え？」
少女が倒れた。うつ伏せで。
…。
（ぶ、武士だー！！）
少女は定番すぎる捨て台詞を吐いてその場に崩れ落ちてしまった。
その姿はまさに、武士。
倒幕の夢半ばに幕府軍の手によって地に伏した攘夷志士を思わせる、見事な散り様。
その姿はまさに、武士。

「って、アホなこと考えてる場合じゃねぇ！おい、大丈夫か！？」
京志郎は慌てて黒髪女に駆け寄り仰向けにして呼ぶ。しかし少女は目を閉じたまま返事をしない。
「お、おーい…もしもーし…？」ゆさゆさ。
肩を軽く揺すってみるがやはり反応はない。
意識を失っているようだ。
「ほっとく訳には、いかねえよなぁやっぱ…」
細かい経緯や理由はどうあれ、彼女をこんな目にあわせてしまったのは自分だし、責任と償いをもって少女を保健室まで連れていくことにする。

京志郎の方も疲労はかなりのものだったので、黒髪少女の重量に身体が耐えられるかは心配だったが、そっと抱き上げると彼女は異様に軽かった。
「羽根のような」という表現を生身の人間に適応させても違和感がない感じたのは初めてだ。
抱き上げた肢体はさっきのまでの風を切って校舎裏を疾走するからは想像しがたいほど、華奢だ。
黒髪女の体を左腕は背中、右腕は裏腿のあたりを支点に持ち上げると、すらっと伸びてた細く長い両脚が陽の光を浴びて白く輝きやた

らと目につく。

そして、間近で見ると少女は顔立ちが本当に整っているのがより一層わかる。

端的な言葉で表せば、美人。それも絶世の。

十人いたら十二、三人は振り返りそうな、現世(うつしよ)の外にすら伝わっても不思議ではない程の美しい眉目(びもく)。

肌も白く透き通っていて、目を伏せ眠る姿はさながら白雪姫。

その儚げな寝顔はとても絵になっていて、京志郎は目を奪われじっと見入ってしまう。

想依に想いを馳(は)せていなければ危うく一目惚れしていたやもしれない。

「…。」

そして少女の美しさを実感する程に、彼女が何をしようとしていたのかが一層知りたくなる。

単なる好奇心とも、真実への探究心ともまた違う何かが、京志郎の心に引っかかりを作っていた。

携帯で時間を確認する。と、同時に予鈴が鳴った。

「やば、ホームルーム始まっちまう！」

湧き上がる疑問は一旦脇に置いて、少女を抱えて保健室へと急いだ。

余談。保健室の先生に言われて気がついたが、京志郎は彼女をお姫様だっこしていたらしい。

2―3

「どうやった？」
昼休み。
いつものように連れ立って食堂へ向かう道すがら、逢阪が思い出したように京志郎に尋ねる。

「どうって、何がだ？」
「何がって、神社や。神社」
「じんじゃ…って、あっテメェ！昨日はよくも嵌(は)めてくれやがったな！」
思わず横でヘラヘラしている関西弁の胸ぐらを掴む。朝から色々あったせいで昨日の徒労のことなどすっかり忘れていた。

「いやいや、嵌めたつもりはないで。俺は『行ってみたらどうや』って勧めただけやし。まぁ、利用しようとは思ったけど」
「一緒だろうがっ！何なんだよあのめちゃくちゃ長い階段は！登るのめちゃくちゃしんどかったんだぞ」
「まぁまぁそう怒りなって。俺にはあの階段を登りきれる自信がなかってんって。その点シローは中学ん時に鍛えっとたし適任やろ？」
「はぁ？」
「それに、あの神社はホンマもんの恋愛成就の神社やし、シローには折角の恋を成就させてほしい。せやから、お前に頼むんが一番適当やってん」
急に真剣な顔になって弁明を垂れる逢阪。この表情も言葉巧み弁明も情報家稼業で培った演技と口八丁(くちはっちょう)にすぎない、ということは判っている。判っているが、
「俺はあんな石段を登るために毎日走り込みをしてたわけじゃないけどな」

そう言って京志郎は掴んだ手を離す。全然腑(ふ)に落ちないが過ぎたことをとやかく言っても仕方がない。
「まぁまぁ、世の中ギブアンドテイクやって！」
「こんな一方的な持ちつ持たれつの関係見た事ねえよ」
そう呟きながら吐く溜息には諦めの色。これからもあれこれ揉めながらも、結局はこの悪友(アホ)のことを憎めないまま付き合っていくんだな、と京志郎は実感する。

「あだっ！何で殴んねん！」
逢阪の頭頂部を京志郎の拳が軽く小突く。
「いや、やっぱ一発くらい殴っとかないといけないような気がして」
「なんやそれー…。まぁええわ。で、実際のとこどうやったんや、神社。ご利益ありそうか？」
「ご、ご利益！？」
「そや。お願いしたんやろ？『月嶋(つきしま)さんとお付き合いができますようにー』って」
「だぁー！声がでけえっつってんだろうがー！」
「わかったわかった。んで、どうなんや？効果のほどは」
「え、あぁ、ご利益っていうか…」

昨夕の事を思い返す。
「祟(たた)り？」
「は？」
「あっいや、何でもない」
（い、言えるわけねー！お願い事してたらなんか知らん間に気失ってて、気が付いたら境内(けいだい)にいたはずが何故か階段下の鳥居のところでぶっ倒れてて、しかも辺りは真っ暗で、夢見心地で家まで帰ってきました。なんて意味不明な上に格好悪くて言えねー！）
「ご利益は…まだ感じねぇな。そんなすぐに効果が出るもんでもないだろ」

説明くさい回想が脳内をよぎる中、なんとか誤魔化す。

逢阪はさよかー、と残念そうにぼやきつつ、どこから取り出したのか、「？」と書かれた手帳に「一日目効果なし」とカリカリ書き込む。

「俺は夏休みのアサガオかよ…」

と、食堂の扉を開けながら呆れ顔で呟く京志郎の脳裏に浮かぶ昨日の怪奇現象、あの青い光。そしてその光の中の青い人影。

「んな買ってくるから、席確保しといてー」

そう言って逢阪が券売機の最後尾へと向かい、京志郎は適当に座席を見繕(みつくろ)って3人掛けの丸テーブルに腰かける。

倒れる前後の記憶は曖昧なのに、あの眩い光だけはどうにも頭の奥に張り付いて離れない。基本的に自分の見た物しか信用しない性質(タチ)の京志郎だが、――母のことも実体験しなければ信じてなどいなかっただろう――昨日のことで自分の目すら疑わざるを得ないような気持ちだ。

（なんだってんだ。どうかしちまったのか、俺の眼は）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0329x/

叶えぬ神に意味はなし

2011年10月11日07時59分発行